



HITORI JAMBOREE Vol.1

峯 大貴

HOTORO JAMBOREE Vol. 1

前口上

この後三〇年もすれば先進国から脱落するとも噂される継続的不況が襲う日本で、一般的には嗜好品に分類される音楽と雑誌の売り上げは下がるばかりである。（もちろん不況の他にも多くの理由が考えられるが。）ましてやそのしんどいところも含めて両者をつまみ食いすることで成立している音楽評論の居場所は年々狭められているのが現状だろう。

ついで近年この業界を襲ったのは日本の音楽評論、ポップカルチャーを形成し、良心であり続けた先人たちに相次ぐ死である。2010年の今野雄二、11年に中村とうよう、そして12年には川勝正幸がこの世を去った。音楽雑誌が一番輝いていた時代を彩った評論家、文筆家を失い音楽評論はこのまま沈んでいくのか。

いや、そんなはずはない。今なお音楽評論は面白いのである。多くの音楽雑誌がアーティストのインタビューを中心とした広告主体型である中で、アルテス、音盤時代、エレキングなどポーターレスに音楽を取り上げ、インフォメーションよりも深い考察と分析による読み応えのある評論記事で構成された音楽雑誌が続々と創刊されている。（エレキングは復刊。）

そしてもう一つ私の音楽評論の希望となっているのが、個人的なこととなるがミュージックマガジンなどで活躍する音楽評論家岡村詩野氏が講師を務める音楽ライター講座に参加したことである。開講地である京都の会場に集まったのは40人ほど、全員が音楽ライター志望ではないにしろ音楽を文章で綴ることに何かしら興味を惹かれた人が関西圏にこれほどいたのかと驚いた。そして岡村氏には現在の音楽評論業界の厳しさと同時に、この業界の魅力をまるで音楽の魔法をかけるようにユーモアたっぷりで語ってもらい、大きな自信となった。やっぱり音楽評論楽しいじゃないか。

ここにつづられた文字列は音楽についての文章に心奪われてしまった筆者の趣味であり、日記で在り、ライフワークで在り、苦行で在り、また夢である。ホントは数人の仲間で集まって編集部と名付けた溜まり場でうんうん唸りながら同人誌みたいなものを作る、いわゆるロッキングオンドリームみたいなことしたいなあとも少し思った。

しかし、齢二十のそろそろ就活を控えている普通の大学生の私である。これからどうやっていくのかは全くわからない…と弱気な気合のままやっていく内に第1号が出来てしまった。編集の経験なし、フォトショップもイラストレーターも使えない機械オンチの野郎一人でやった結果はフリーペーパーでも電子書籍でも同人誌でもブログでもなく、ツイッターのTLで呼びかけ配布するPDFによる公開と相成った。この媒体を何と呼ぼうか。

しかしミックステープというヒップホップのアーティストから広まった、自分の作品をネット上で無料ダウンロード出来る形で発表する音源流通が隆盛の時代である。ミックステープについての詳しい記述はミュージックマガジン2012年4月号の特集や、TBSラジオ「ライムスター宇多丸のウィークエンドシャッフル」で2012年2月4日に放送されたサタデーナイトラボ「最新USAHIPHOP特集」（現在もポッドキャスト配信中）をチェックしてもらおうとして、とにかく発表の場が何でもありになっているということだ。

何にも決まらぬままにとにかく筆を持つ手だけは止めない特訓の場として進めていくことにした。すこし古臭い響きのするタイトルも今のところの仮題である。1971年の暑かった夏に思いを馳せて。今ある熱意と衝動の吹き溜まりに日の目を当てて、それではまいりましょう。

H I T O R I

J A M B O R E E だす！

○特集
「モダン」から「プレ・モダン」を
繋ぐMTKの世界

音楽雑誌のインタビューで御誂え向きの質問として「最初の音楽体験は？」や「最初に買ったCDは？」と聞いているのをよく見かけるだろう。歳を重ねるに連れて音楽的嗜好の紆余曲折はあれど、確かに最初の能動的音楽体験は個人の根底となっていることは多い。例えば槇原敬之はYMOやカーペンターズの音楽にしばれ、フジファブリックの志村正彦は奥田民生の音楽に陶醉したなどアーティスト一人一人に音楽的根幹がある。

しかし、これらの音楽体験はあくまで音楽に目覚めたきっかけであり実際はそれより以前にもアンパンマンなどのアニメ番組の主題歌や「おかあさんといっしょ」（Eテレ）などの教育番組で流れる童謡やCM音楽などを口ずさんで育ち、人によっては胎教として生まれる前からクラシックというポピュラー音楽と相対する物をすでに聴いているではないか。この誕生以前の音楽体験から音楽に対して明確な認知によって興味を持つまでの期間をジャズっぽく「プレ・モダン音楽体験期」、それ以降を「モダン音楽体験期」と便宜上定義しよう。

この特集は1990年代以降に生まれた人にとってのいわゆる「プレ・モダン後期」、大体小学校から中学校入学前後に一定数の人が耳にさせていただこう音楽、MTKについてである。MTKとはEテレで現在も放送されている子供番組「天才てれびくん」シリーズ（現在は「大！天才てれびくん」）のコーナー「ミュージックてれびくん」の略称である。天才てれびくんと言えば小学生～中学生の子役タレント20名ほどがてれび戦士として出演し様々な企画を行うという1993年スタートの長寿番組であり、この番組からウエンツ瑛士や大沢あかね、生田斗真などを排出している。

1998年から現在まで続く人気音楽コーナーであるMTVはてれび戦士たちがソロまたはユニットを組んで作られた楽曲のMVが流れるというものだ。80年代の音楽シーンに大きな影響を残したテレビチャンネルMTVをモチーフにしているのはおわかりだろう。てれび戦士たちが歌う楽曲は邦楽・洋楽のカバーや種とともこ、遊佐未森、森若香織、広瀬香美などの一流アーティストから提供された書き下ろしなど多様である。2006年までのほとんどの楽曲はゴダイゴのタケカワユキヒデが編曲・プロデュースを担当しており、ここで生まれた楽曲が子供番組の一コーナーにしておくにはもったいないほどの名曲ぞろいなのである。

なお2006年以降のタケカワユキヒデが離れてからは作家陣を固定せずより幅広いオリジナル曲のみを歌うというスタイルに大きく変わっている。したがって今回はタケカワが大きく関わっていた98～06年の楽曲について特集する。

このMTKの魅力の一つとして子供番組らしからぬカバーの選曲にある。洋楽で取り上げられた代表的なものとしてスプリームス、アバ、マドンナ、カイリー・ミノグ、ベイ・シティ・ローラーズ、ヴァン・ヘイレン、ビージーズ、マイケル・ジャクソンなど世界的アーティスト（しかもほとんどが大ヒットしたヒット曲をカバー）から、アメリカ・ニューウェイブ・パンクバンドのB-52ズや、80年代前半日本で人気を博した西ドイツの音楽グループ、アラベスクなど「これ、子供たちが歌うの？」とぎょっとしてしまうほど通な選曲も目立つ。カバーと言っても「プレ・モダン」にわかりやすくするようなマイルドアレンジは成されず、時にはてれび戦士たちがバグルズ「ラジオスターの悲劇」のニューウェイブをコーラスまで完璧に、またキッス「シャウト・イット・アウト・ラウド」のハードロックをあのメイクも込みで再現させてしまうのだ。

また洋楽カバー曲はでたけかわユキヒデが日本語訳詞もしているのだがこれは、ザ・ピーナッツ「レモンのキス」や中尾ミエ「可愛いベイビー」に代表される1960年代までの日本の歌謡界におけるアメリカン・ポップスの日本語訳カバー文化が隆盛だった時以来、約30年の時を越えてここに再び栄えている。（ビートルズがデビューするとビートルズの日本語訳カバーのみをレパートリーとする東京ビートルズやクール・キャッツなんてグループも当時いた。）しかしたけかわユキヒデの訳詞は60年代以前のようなメロディに日本語をいかにも「はめ込む」ようなスタイルではなく要所に原曲の英詞を残しているのが特徴である。これはゴダイゴが1970年代後半から先陣を切って行い、確立した日本語と英語の同居スタイルがMTKでも活かされた形である。ちなみに90年代英詞を日本語詞に出来るだけそのまま訳すという直訳ロックを作りディープ・パープルのカバー「深紫伝説」などのヒット曲を持つ王様も訳詞（前述の「シャウト・イット・アウト・ラウド」）や番組コーナー出演などで大きく関わりがある。

邦楽カバーはゴダイゴ、真心ブラザーズ、RCサクセション、ホフディラン、つじあやの、原田知世など80年代～90年代のポップやロックが多いが洋楽と違って誰もが知っている名曲ではなくそのアーティスト隠れた名曲を発掘しているような作品が大多数を占めている。

楽曲を歌うてれび戦士のユニットはほとんどが一曲限りのものが多いのだが、（てれび戦士が年度ごとに加入、卒業をするシステムのため）中には反響が大きく数曲歌っている人気ユニットもあり、その最たるものはモンキークイーンである。ジャスミン・アレン、佐久間信子、モニック・ローズの女性3人組であり1999年にバナナラマの「第一級恋愛罪」（MTKでは「恋のギルティー」に改題）とアバの「ママ・ミア」をカバーしている。当時のてれび戦士の中で突出した歌唱力、ダンススキルを持った3人が集まり、楽曲・質合わせて最も元ネタであるMTVに近いパフォーマンスを見せ、人気を博していた。モンキークイーンがMTKの中でも別格であるということはモニック以外の2人がすでにてれび戦士を卒業した2001年に2年ぶりの復活を果たし、ノルウェー出身の女性ユニットM2Mのストリングスをフューチャーしたエレクトロな楽曲「エヴリシング・ユー・ドゥ」のカバーを披露したことからもわかる。

もちろん「プレ・モダン」の時期なのでその楽曲がどういうものなのかということとはわからない。しかし毎日のように聴き続け、てれび戦士と一緒に歌って童謡と同じようにポピュラー音楽をいつの間にか覚えているのである。天才てれびくんを見ていた人の中にはマイケル・ジャクソンの「スリラー」もカルチャー・クラブの「カーマは気まぐれ」もたけかわユキヒデの日本語訳詞で認識しており「モダン

」の時代になってこれらの原曲に出会うと「こっちが本物か！」と点が線になったような大きな衝撃を受けたという人も多いのではないのだろうか。「プレ・モダン」から「モダン」へ移行するきっかけになる要因は人それぞれ多様にあるだろうが、この「モダン」から「プレ・モダン」だった頃を引き付け、なおかつ「モダン」の血肉としてしまう例はあまりないだろう。

現在音楽をよく聴くという人ほど「プレ・モダン」に天才てれびくんを見ていたかどうかを抜きにして今こそMTKを再評価してみるのも面白いのではないだろうか。確かに数ある楽曲の中にはてれび戦士の歌唱力が足りないというものもある。しかしそれを考慮しても決して子供だましではなく、ポピュラー音楽の魅力がたっぷりと詰まっている。

なお毎年、その年度に放送されたMTKを集めたアルバムがこれまで18枚（内2枚がベスト）が発売されている。

◎MTK名曲ガイド

曲名

①歌

②放送年度

③収録アルバム（レーベルは全てコロンビア）

8 c m

①ウエンツ瑛士

②1998年

③うたの詰め合わせ ～天てれ福袋～

現在150曲近くあるMTKの記念すべき一曲目は変声期を迎える前の当時12歳のウエンツ瑛二が歌う日本のロックバンド、スキップカウズのカバー。原曲は冴えない男のダメさを歌ったものだが子供のウエンツが歌うので初恋をイメージしたアレンジになっている。ウエンツは2006年に小池徹平とのユニットWaTとして「5センチ。」というシングルを出し、作詞も自らやっているが8年の間に縮まった3cmにどこか感慨深さを受ける。

YAKINIC GO GO

①松川佳以

②1998年

③うたの詰め合わせ ～天てれ福袋～

・MTK The BEST II～for LIFE

MTK初の書き下ろし楽曲となった種ともこ作の本楽曲はコテコテの大阪メタファーをふんだんに取り入れた焼き肉PRソング。ユニコーン「服部」を思い起こすようなハードロックリフにのせて勝気な女の子が家族と焼き肉を喰らいつている様子が描かれている。コミックソングのような体を成しているものはMTKにも数曲あるがその中でもこのパンチの効いたトラックとキャッチーなメロディは98年の時点で最高傑作と言える。テレビ放送サイズしか製作されていないのか2分ほどで終わってしまうというのと、テレビ放映時では入っていたてれび戦士の橋田紘緒による間奏でのおじさんゼリフがCDでは入っていないという点が悔やまれる。

世界中の全ての色

①ウエンツ瑛士、伊藤俊輔、ジャスミン・アレン

②1999年

③天てれ大入り袋～ミュージックてれびくんパワード/MTK The Second～

シンガーソングライター坂本サトルの書き下ろし曲を天才てれびくん黄金期の象徴ともいえる3人が歌う。90年代の王道とも言えるKey D特有のゆったりとしたポップメロディにサビ後半のシンコーペーションのブレイクが感動の余韻を残す名曲。声域の全く異なる3人によるハーモニーも秀逸。歌詞やMVでも「旅立ち」の雰囲気漂っており、案の定この楽曲を最後にウエンツとジャスミンがてれび戦士を卒業し、MTKは新たな章へ行くことになる。

愛はきらめきの中に

①セブン・ハーツ（饗場詩野、伊藤俊輔、エバンス太郎、熊木翔、佐久間信子、ダーブロウ有紗、モニック・ローズ）

②2000年

③天てれ歌まくら～MTK the 4th～

初期MTKの2枚看板であったウエンツ、ジャスミンが去った後のMTKの中心を担ったのはこれまでもMTKに度々登場した佐久間、ダーブロウ、モニック、伊藤、山元竜一などの古参メンバーに加えてこの年2000年に加入した熊木翔であった。透き通った声と小学生とは思えない歌の表現力で多くの楽曲を彩っている。実力派メンバーが集まった本作はビーズのアメリカビルボード1位も記録した大ヒットナンバー「ハウ・ディープ・イズ・ユア・ラヴ？」のカバー。目立ったアレンジはキーを4音半上げているくらいでほとんどなされず、ビーズの最大の魅力であるコーラスワークも完璧に再現している。サビでのダーブロウが歌う最高音パートの美しさと熊木のソロパートの感情の入れっぷりは注目すべきところである。

誕生日のうた

①ヴィーナス&マーズ（村田ちひろ、橋本甜歌、川崎樹音、白木杏奈、ジョアン・ヤマザキ、井出卓也）

②2004年

③MTK the 9th/MTK The BEST II～for LIFE

タケカワユキヒデが音楽監督として全面的にMTKに関わる末期の作品でタケカワ自身の書き下ろし。トラックはリズムと装飾程度の打ち込み反復フレーズのみで何声もの輪唱が入り組むコーラスワークが主体となっている。Aメロでは20小節に渡ってハスキーボイスの村田が歌うメインメロディと合わせて井出のラップが被っていたり、最初と最後のアカペラパートでは4拍3小節を2回繰り返す、2拍はさんでまた4拍3小節で終わるといった複雑な構成により不思議な輪唱の響きとグルーブを成しているなどかなり実験的なアプローチを見せている。なおMTKの中では唯一2年後の2006年に「誕生日の歌2006」として歌うメンバーを変えたMTK内でのセルフカバーが製作されている楽曲でもある。

○新作ディスクレビュー
安藤裕子「勘違い」

感情の開放が突き抜ける
高らかな新章突入宣言

安藤裕子1年半ぶり6枚目のオリジナルアルバム「勘違い」を一聴した時の印象は「安藤裕子ってこんなだったっけ？」だった。その疑問は繰り返し聴けば聴くほど膨らむのだが、ポップサウンドとしての極限を突き詰めたような前作「JAPANESE POPS」と比較することは無機質な散布図上にまとめてしまうような野暮なことだと感じさせられた。

また妊娠と出産を経た彼女の心情の変化を歌詞の中に酌むにしても母性が垣間見えるのは直接的な歌詞表現をしている「誕生日の夜に」のみであり、ここにくるまで彼女が母になっていることをとんと忘れていたのである。それよりもぐっと心を持って行かれたのはこれまでも時折垣間見えていた、自分の中の感情を奥深くまで解放している点にある。

先行シングル「輝かしき日々」は新章の幕開けを感じるダイナミックな歌詞と雄大な節回しが光るピアノアンセムだったので次作はストレートなアルバムになることを予感していた。しかし完成した今回のアルバムを包んでいたのは自身の感情を全方位に解き放ったものであった。オープニングの「勘違い」では定位を左右に振り切ったハンドクラップと幾重にも重なるコーラスが成す怪しいリズムの上を彼女の声が飛び交う聴像がレディオヘッド「15 steps」を思わせる。次曲「エルロイ」は叩きつけるような怒涛のピアノに合わせてまくしたてるように言葉を放ったかと思えば、急にオペラのような猛々しい世界観が広がるナンバー。この冒頭2曲の作為的ではない狂気の発揮がこのアルバムを象徴している。曲中に目まぐるしく拍子、テンションが移り変わる構造のものが「エルロイ」の他にも、前作に引き続き編曲にオランダ人ポップミュージシャンのベニー・シングスを迎えた「すずむし」、最後に配置された「鬼」と3曲もあり自制の効かない熱量を印象付けている。

それぞれの曲は熟考して「生んだ」というよりも生活の中で勝手に「生まれた」と言う方が合っている。その結果私たち聴取者や、ともすれば安藤裕子自身をも振り回してしまうようなわがままな曲群が並んだ。しかし彼女はアルバムのバランスを考えることよりもそれぞれの曲にとことん付き合った歌い方をしているので、前作までの緻密に練り上げた曲群達とは異なり、メソッドを廃したことによる開放感が溢れている。吐息を押し出すような揺らぎのある低音から、愛らしい幼児性を持った高音まで多彩な歌いっぷりもより磨きがかかるばかりだ。

「こんなだったっけ？」という疑問を抱きつつもどんどん安藤裕子らしさを確信していくということはこれまで彼女の音楽を勘違いしていたのかもしれない。しかし冒頭の疑問や考えを回収することなく「まいっか」で済ませてしまうような自由で飄々した様も魅力となっているアルバムである。

『勘違い』 安藤裕子

カッティング・エッジ

CTCR14760

2012/3/28

○無差別中古旧盤レビュー
エサ箱より愛を込めて…。

「エサ箱」とは中古レコードの入った段ボールなどの箱の俗称である。レコードを黙々と選んでいる人がまるでエサ箱からエサをついばむように見えたからだろうか。また数百円とかなり値段が下がったレコードばかりが入った箱という意味もあるようだ。1991年生まれの現在大学生である筆者にとってもレコードがCDに変わっただけでエサ箱の恩恵は多大に受けている。(CDとなるとエサ箱というよりもエサ「棚」から掘ることが多いのだが)「エサ箱より愛を込めて」とありますがここではエサ箱のみならずとにかく中古で購入したCDを有名・無名、新・旧、筆者がその分野に強い・弱いに関わらず取り上げる。取り上げる盤によっては無知が露呈する可能性があるがご了承を。

①『アザディ！？』

ヤポネシアン・ボールズ・ファウンデーション

リスペクトレコード

RES-63

2002/5/22

盟友であり、名曲「満月の夕」も共作したソウル・フラワー・ユニオン（以下SFU）の中川敬とヒート・ウェイブ（01年当時は休止中）の山口洋を中心として2001年に結成された企画色の強いロックンロールバンドの現時点で唯一のアルバム。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドやボブ・ディランなどのカバーと、中川・山口お互いの楽曲のセルフカバー、新曲で構成されている。

お互いの長いキャリアの中で西欧、非西欧問わず多様な音楽性を抱擁し、作品を発表してきた2人が集まってアルバムを作るとこれほどまでにストレートでバタクさいパンク・ロックンロールになっていることに思わずニヤついてしまう。大人たちがロック少年だった頃に戻ってバンドを楽しんでいるようなサイドプロジェクト感覚はピロウズの山中さわおとGLAYのJIROを中心としたザ・プレデターズを聴いている気分にも似ている。

しかしこの当時はまだ9・11の影響あってか本アルバムもかなりの社会風刺、反体制のメッセージ性が含まれている。特に中川の詞による「キル・ザ・プアー」、「ボード・ウィズ・ザ・USA」、「ヤポネシアン・ダイアリー」は反米、差別、情報隠ぺいなどの問題を痛烈に皮肉っているが、これほど直接的な表現はSFUよりもその前身であるニューエスト・モデル時代のまだ血の気たっぷりの中川を久々に感じさせる。しかしこれ以降9・11の余韻が残る数年間、中川はSFUに戻り、より直接的な表現で反戦のメッセージを唱えていく。(その極致が04年のシングル「極東戦線異状なし！？」である)9・11以降の反戦歌として、また中川敬・山口洋という日本ロックの奇才2人が全面的にタッグを組んだアルバムとしても重要な一作である。

②『ごめんね、SUMMER』

S K E 4 8

日本クラウン

C R C P - 1 0 2 5 5

2 0 1 0 / 7 / 7

A K B 4 8 プロジェクトの一翼、名古屋・栄に拠点を置くアイドルグループ S K E 4 8 の 3 枚目のシングル。今でこそヒットチャートの絶対王者の風格すらしてきた A K B 一派であるが、当時の S K E 4 8 は本隊 A K B 4 8 に追いつけ追い越せといったキラキラとした様相が楽曲からも感じられます。本作の表題曲は D E E N 「瞳そらさないで」を彷彿とする、まさに 9 0 年代 J - P O P の王道夏ソング。サスティンたっぷりのイントロギター、要所要所に散りばめられた上昇シンセフレーズ、Bメロのカスタネット、コーラスの男性声など随所に夏を感じさせるメタファーが取り込まれている。

印象的なのは松井玲奈の声だ。ハスキーなのだが高音成分が多く、Aメロのソロパートもダブルトラック（レコーディングで2回同じフレーズを歌って重ねること。ビートルズが最初にやったとされる。）に何故か聴こえる不思議な歌声であり、サビの全員の歌声の中でも存在感を示している。（注・本当にダブルをしているのかもしれないが、同じくAメロでソロをとる松井珠理奈が明らかにシングルと思われるため。）クレジットを見ると7人で歌っているようで、やはりこれくらいが声を聴き分けられる限界の人数だなと感じた。

③『オイ！リンバ』

サカキマンゴー&リンバ・トレイン・サウンド・システム

ヨカバナナ・アンリミテッド

Y K B N - 0 0 4

2 0 1 1 / 9 / 1 1

昨年9月の発売なので旧盤と言えるのかもギリギリだが、確かに中古レコ屋の何故かJ-P O P 棚のサ行から見つけましたよ。日本人アーティストだし間違いではないのだが…

生前の中村とうようも高く評価していたサカキマンゴーはアフリカ発祥の楽器である親指ピアノ奏者であり、本作はベース、ドラムを引き連れタンザニアのリンバなど各地の親指ピアノを多彩なアプローチで演奏している。

複雑な変拍子に加え、まるで潮の満ち引きのように行っては戻るリズムは長尺のプログレよりも引き込まれるハードなグルーブを形成している。歌詞はサカキマンゴーの出身地である鹿児島弁で歌われており、言葉の訛りそれ自体がメロディとなってアフリカ音楽と絶妙の混血音楽が完成している。

各曲に散りばめられている様々な仕掛けはアルバム通して楽しましてくれるが、特筆すべきは「魚を捕る」という意味の鹿児島弁である9曲目「イオトイ」である。全編鹿児島弁で歌われるラップは九州弁ラップを長崎弁で取り入れているさだまさしの「がんばらんば」を彷彿としたが、重低音のベースとリバーブがかかった浮遊感のある親指ピアノの音色は鹿児島弁を怪しく輝かせている。

楽器や言葉は昔からあるものの模倣かもしれないが、これらの取り入れ方、混血の仕方はまさにサカキマンゴー的ともいえる独自性がある。単なる親指ピアノ奏者ではなく、サウンドプロデューサーとしての気概と才能に溢れた作品だ。

編集後記

「HITORI JAMBOREE Vol. 1」無事発行することが出来ました。読んでいただいた皆さま誠にありがとうございます。音楽の楽しみ方として「聴く」、「歌う」、「演奏する」の他にも「語る」ことの魅力を伝えたいという気持ちから発行の動機に至りました。お試し版とあって最近のお気に入りや、音楽に対して思うことなどとにかく今書きたいことを好き勝手に書いていく内に結構な分量になってしまい、さらには偶然ではありますが全て邦楽アーティストに関する記事になってしまいました。てんやわんやも慣れてくると次第に何かしらのコンセプトチュアルなこともしていけたらいいな思っております。

かなりアングラ様相をしておりますが、このような雑誌作りは初めてのことであり、文章を書くにあたって「歌詞引用したいな〜。」や「ジャケ掲載せたいなあ〜。」といった願望が沸々と出てきて、ネットで調べたり、著作権法を読んだりなどしましたが素人目には非常に境界線が曖昧なところもあり、今回は意図的に避けております。これまでぶち当たったこともない疑問の発見や、まだまだ足りない知識・文章力に、なお一層の鍛錬が必要だと感じております。ご指導よろしく願いいたします。

著作権のことを含め記事や編集における意見・感想・指導・批判をお待ちしております。ツイッターアカウント@mine_cismよりお気軽にどうぞ。この場により何かしらの輪が広がればこれ以上に幸いなことはございません。

次号でも皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

HITORI JAMBOREE

Vol. 1

2012年4月25日発行

発行人 峯 大貴

ツイッターアカウント

@mine_cism